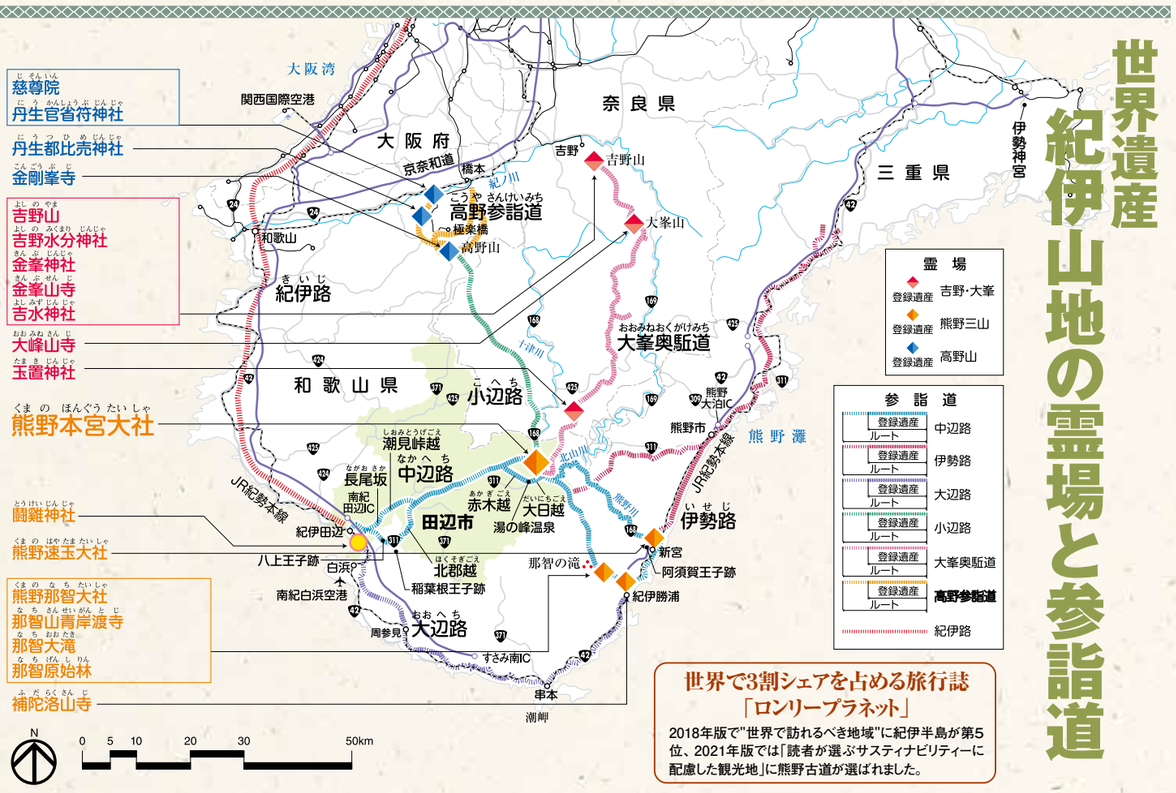
世界遺産 紀伊山地の霊場と参詣道



世界で3割シェアを占める旅行誌「ロンリープラネット」
2018年版で"世界で訪れるべき地域"に紀伊半島が第5位、2021年版では「読者が選ぶサスティナビリティーに配慮した観光地」に熊野古道が選ばれました。

熊野古道とは

熊野三山へ通じるいにしえの参詣道を熊野古道と呼びます。平安時代に始まった上皇たちの熊野御幸によって知られるようになった熊野信仰は、時代が下るにつれ武士や庶民にまで広がり、一時は「蟻の熊野詣」と呼ばれるほど多くの人々が熊野を目指しました。

熊野古道にはいくつものルートがありました。京都・大阪からのメインルート紀伊路、高野山と熊野を結ぶ小辺路、伊勢と熊野を結ぶ伊勢路です。紀伊路はさらに田辺で紀伊山地に分け入る道と海岸線を南下する道にわかれ、後に前者を中辺路、後者を大辺路と呼ぶようになりました。

中辺路は、平安時代から鎌倉時代にかけて上皇たちが参詣を100回以上も繰り返した熊野への公式参詣道(御幸道)として知られます。

険しい山道が続く中辺路を歩くことは修行でもあり、困難が多いほど熊野の神の救いも大きいと人々は苦しい道のりを越えて熊野をめざしました。

上皇たちの御幸道だっただけに、紀伊路・中辺路沿いには熊野九十九王子と呼ばれる熊野の御子神が祀られていました。京都伏見から淀川を舟で下った上皇たちは、大阪に上陸した後、一番王子とされる窪津王子に参拝し、街道沿いの王子を巡拝しながら長い旅を続けました。上皇たちの熊野御幸の際には、王子のなかでも格式高い五躰王子で歌会などが催されたことが、後鳥羽上皇に随行した藤原定家の『後鳥羽院熊野御幸記』にも記されています。

困難な旅を越えて熊野に詣でるのは一体何のためだったのでしょう。熊野は昔から蘇りの地とされていました。この意味は、黄泉の国熊野に足を踏み入れ、一度死んで魂を浄め、熊野から出るころには再生を果たすということです。前世の罪を速玉が浄め、現世の縁を那智が結び、本宮は来世を救済するといわれ、三山を巡れば、過去、現在、未来の安寧を得る。これが熊野三山のご利益と考えられたのです。

熊野の神は「浄不浄をとわず、貴賤にかかわらず、男女をとわず」受け入れてくれる神だったからこそ、上皇から庶民まで熱狂的な信仰を集めたといわれます。熊野古道は罪障の消滅と再生を願う人々の足跡が残る祈りの道なのです。

熊野の神の使い八咫烏
サッカー日本代表のシンボルマークになっている3本足の鳥が八咫烏です。海上から遠望した那智の滝を目印に上陸した神武天皇を大和の地まで導いたと『日本書紀』にも記されている伝説の鳥です。熊野の神の使いとされ、日本神話の世界では太陽の化身とされています。

熊野速玉大社 MAP 和歌山県 E-5
熊野川河口に鎮座する熊野三山の一つ。主祭神の熊野速玉大神は熊野川の神格化に起源を持つといわれています。

熊野那智大社 MAP 和歌山県 E-5
那智山中腹に鎮座する熊野三山の一つで、その起源は那智大滝の信仰にあるとされています。那智の火祭でも有名です。

那智山青岸渡寺 MAP 和歌山県 E-5
西国巡礼第一番札所です。明治の神仏分離までは熊野那智大社と一体で、現在の本堂は当時の如意輪堂だったものです。

熊野本宮大社
全国約4700の熊野神社の総本宮、熊野三山の一つ。「熊野権現御垂迹縁起」では、主祭神の家都御子大神は大斎原のイチイの木に降臨したとされ、木の神と崇められ、紀(木)の国の名の由来になったといいます。

世界遺産 神々の宿る聖地 熊野三山

世界遺産と熊野三山

世界遺産に登録された「紀伊山地の霊場と参詣道」。霊場とは、熊野信仰の中心である「熊野三山」、修験道の拠点「吉野・大峯」、真言密教の根本道場「高野山」の三ケ所のことです。深い山々が重なりあう紀伊山地では、自然崇拝に根ざした神道、外来の仏教、その両者を結びつけた修験道など、多様な宗教が育まれ、日本人の精神的、文化的側面に大きな影響を与えてきました。参詣道はこの三つの霊場を結び、また全国からの巡礼者が霊場を目指して歩いた道のことです。

熊野とは、大化の改新以前に熊野国があった場所とほぼ一致します。重なりあう山々、鬱蒼と茂る樹林、その山を源にして流れ下る川はやがて広大な太平洋に注ぎます。ある時は豊かな実りを、またある時は猛々しく災害をもたらす自然に人々は神の恵みと怒りを見たのでしょうか。

大斎原 MAP 1 C-5 MAP 4 B-3

川の熊野古道・熊野川

紀伊山地に育まれた宗教のうち、神道を代表するのが熊野三山と呼ばれる熊野本宮大社、熊野速玉大社、熊野那智大社です。

熊野三山の歴史は古く、なかでも熊野本宮大社は2018年(平成30年)には創建2050年を迎えました。熊野本宮大社は、かつて熊野坐神社と号していたように、熊野の神といえば本宮のことをさしたともいわれます。上古から「神のいます場所」とされた熊野が全国に知られるようになるのは、10世紀の宇多法皇の熊野御幸からです。平安時代には皇族や貴族が、中世になると武士や庶民にまで熊野信仰は広がってゆきました。